
次元を越えて

夢路雪乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元を越えて

【Nコード】

N8201N

【作者名】

夢路雪乃

【あらすじ】

更新は遅くなりますが、しっかり書いていきたいと思えます。

剣術道場の家に生まれた女の子が時間（次元）を越えて少し生き方を考えていくというSTORY

設定

主人公 女
笹原 実 ささはらみのり

剣術の家に生まれたもののまともに練習しなかった。アニメが好きで、色々観ている。

ある夜に変な事に巻き込まる。

アニメの世界に連れていかれる女の子のお話。

主人公はアニメの世界に連れていかれて、どう過ごしていくのか。

剣術の修行をさぼり続けて二年。

少しは使えるけどあまり役には立たない。

さあさあ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！（読んでらっしゃい？）

いざ！始まり始まりー！！ てな訳で。

頑張ってきますー！！

旅の始まり？（前書き）

更新遅いの短い…。

実「最悪の状態だね」

言わないで、言わないで！

本当に

「すみません」

私のセリフ！

旅の始まり？

私の家は剣術を教えている道場だ。

両親も祖父も鍛練をしているのを私は何度も見てきた。

そして私も剣の道を歩むと決めて、私も鍛練に参加した。

ただ、今私は剣が怖くて剣を捨てた。

剣のせいで両親が死んでしまったのだ。剣のせいというより、地震のせいと言ったほうが良いかも知れない。

地震によって、壁に飾っていた剣が落ちてきたのだ。父は母を庇ったが、剣は父と母の頭を一直線に貫いた。

運の悪いことに鞘をつけていない剣だけが落ちていた。

私は祖父に

「剣を捨てる」

と話したら、祖父は

「そうか」

としか言わなかった。

祖父は残念そうに、仕方なく諦めたのだろう。

それからというものの、私は普通の女の子として過ごした。恋愛は全くで運動と勉強はそれなりに。

「さあ、そろそろ寝ようかな」

今夜も遅くまで起きてた。本に入り込み過ぎたみたいだ。

私は部屋の電気を消して寝た。

風が吹いてくる。

窓なんて開けていないはずだが…。そう思って目を開いてみた。
そこには広い草原がただあるだけ。

「夢？」

頬をつねってみるが

「痛い…」

夢ではないようだ。

なら現実？
リアル

いやいや、さすがにそれはないよ！

これからどうしよう

時は金なり。

この時もまた貴重な物になるのだろうか。

旅の始まり？（後書き）

「どうでしたか？」

いや、まだ駄目だね。

なんせ更新遅いの短いつて！！

……ごめんなさい。

もつと

「出来るだけ長くしますね」

だから私のセリフ…

「あと、感想あればどうぞです。ダメ出しでも大丈夫ですよ」
取るな〜！

あと話聞けやい！

さてさて（前書き）

長らくお待たせしました！

：待っていてる人はいないかもだけど

取り敢えず読んで下さい

さてさて

とりあえず私は周りを見回した。

山、山、山。

「だけ!？」

山しかないように見えたので、もう一度見回した。
すると、山の近くに街が見えた。

「とりあえず行ってみよう」

私は立ち上がり、街へと向かった。

街に入るとまるで昔の時代に来たみたいに見え、街並みは昔風だった。
服も昔の物、腰には剣を差していたりする。

「コスプレかなあ…」

特に私は気にしなかった。

ただ、歩いていると視線を感じた。

「外部の人間は入っちゃいけないかったのかな？」

と思い、話しかけてみる。

「あの、すみません…」 丁度一人で団子を食べている男の
人がいた。

「ん？」

「此処ってどこですか？」

しばらく沈黙があり

「姉さんはどこから来たんだ？」

聞いたのはこっちなのに。

「私は東京から来ました」

またもや沈黙。

「もう一度言ってくれるかい？」

私は同じ言葉を返した。 「外国の人か？」

いや、日本ですが！？

ということを男の方に伝えてみる。

「……。日本って何処だ？」

話が通じない。

敢えて逆に聞いてみる。

「ここは、なんという国ですか？」

すると男の口から物凄い言葉が出てきた。

「ここは甲斐の国だ」

……。

はい？

甲斐の国ってことは、昔の地名だよ。

真田幸村とかさ、その辺だよ。

「甲斐の国ですか？」

まさかね。

聞き間違い、または漢字の間違いだよ……。

しかし男は言った。

「そうだ。信玄様が治める国だ」

あつはつは！

…神様。

私に何をしろと言うのですか？

私はただ平和に暮らしたいだけなのに！！

しかし、どうしたものかね

どうやって生きていこうか？

「その女、止まれ」

いや、参ったな。

お金はない。

取り敢えずバイト？かな

「止まれと言っているのだが？」

ナンパしてる人は戦国時代にもいたんだね〜

さつきから必死じゃない

「貴様の事だ!!」

肩をいきなり掴まれた

「うわっ」

何々！私なにもしてないよ!？

肩を掴まれ、連れていかれたのは屋敷みたいなところ。
拉致かな…。

この時代にも内臓とか売られたりするのかな？

「女」

なんかイラついた…。

「私は女という名前ではないです」

しばらくの沈黙

「名前はなんだ？」

礼儀をしらないね〜

「そういうのは、先に貴方の名前を言うものではないのですか

？」

「確かに」

そう納得したあと、名前を話した。

「私の名前は…」

さてさて（後書き）

実「短めだね」

前回と同じになっちゃった！！てへっ！！

実「気持ち悪いけど」

次回こそ…。

作成した原因（前書き）

なんか眠いわ。

「この時間まで起きてるからよ」

ですね。

作成した原因

「そっぴやさ、雪乃」

ん？なんだい？

「あんだ、最近ハ調子どうなのよ」

そっだね。

まあまあかな。

「詳しく話しなさいよ」

まず、金運

普通

「ま、最近ハ頑張ってるものね」

で、恋愛運

まずまず

「まずまずってなによ？」 好きな人はいる

っただけさ

「ふーん」

で体は。

かなりヤバイ

「…は？」

いや、実はね風邪ひいたんだけど、頭痛薬飲んだら大分マシになっただ

ただ、眠気とかハンパない

「こんな時間まで小説家に来てるからじゃないの？」

いや、家庭で。

ちよっとした遊びなんだけどね

今負けまくってるんだよね。だから次から本気でやろうかな、っと思っただけけど、一円賭けだからテンション上がらないわけよ「ったく。馬鹿」

うるさいわ

ただ、半端なくダルい。さつさと終わらせたいのに終わらないしあがってるのに文句は言うし

勝ってるんだから良いじゃんとか思うんだけどね

まあ、負けてる俺が言えないけど

ちよつとは勝たなきゃ

「ふふ。まあ、元氣そうで安心したわ」
いきなりどうしたんだよ？

実が心配するなんて珍しいじゃないか。

「いや、少し予感がしてね」
何の？

「もうすぐ、行かなきゃいけないでしょ？」

……。

実が心配する事じゃないだろ？

「あんた、人に見せないからね。弱さを」

そんなことないさ。

認めた人にはしっかり話をしてるし、相談もするし

まず、俺が真剣に動くのは大事な人の為だけだし

「好きな人とか？」

まず、友達が好きな人がいるとする。

で、フラれたとする。

俺はそこで動くね。

相手を調べたりするし、関わりも持つ。

たとえ、俺が嫌われようとそいつには幸せになつてほしいから、

俺は外道にでもなれる。

「あんた、自分は？」

なにが？

「自分、そんなことしてもらったことあるの？」

ないね。

そんな物好き居ないし

まずさ、皆いうんだよ

そんなことして付き合えても、自分の力じゃないって

「まあ、そうよね」

だけど、考えてみて？

俺がするのは、その友達よりも悪い態度を取ることを主にして
いる。

「どういうことよ」

相手の見方を変えさせるんだよ。

つまりは、悪い態度を取り、トドメに相手に好意がある態度を
取る。

すると相手は、

あ。この子、結構良いじゃん

って思うようになる

それだけ。

「人間の心理ね」

この方法で上手く行ってる人がたくさんいるんだ

だから俺はこれからやりつつけるよ

誰かの為にただひたすら

「ま、それもあんたよね」 そういうこと

そろそろ寝ようか？

「待って。最後に」

ん？

「色々、後悔してない？」 ……。

今までにか？

「うん。好きな人には先に逝かれて、やっとまた好きな人が出来て
も親しい人間に捕られ、しかもその相談まで受けて、助言までして
上手く行かせて」

……。

いいんだよ。

先に逝かれてしまったのには、困ったけどな

沢山、笑顔もらったし。満足してる。まだ心に生きてるし。

また好きな人が出来たらいいんだよ。

今居るし、好きな人。

あと、上手くいってもらったら、笑顔が見られるだろう？

あの笑顔を見るだけでいいからさ。俺は。

だからさ、いいんだよ

「そう」

ああ。

さて、寝るか？

「そうだね、。」

じゃあ、おやすみ。

朝樹。また夢で。

そう。

次元を越えて、また

作成した原因（後書き）

あ。

もう大晦日じゃん！

「気づくの遅いわよ！」

今度こそ旅の始まり（前書き）

いやー長かった。

何がつて？

投稿する期間が。

すいませんでしたっ！

今度こそ旅の始まり

衝撃的な事実を知ってしまった。

まさか、あの戦国時代がこんな風になっちゃうなんて。

「某の名前は真田幸村」

うわゝ

姿見たときから思ったけどやっぱりか…。

「私の名前は笹原実です」

ていうか一体何の用なんだろう？

「は？」

なんだって？

「だからだな、鬭いのない時代にしたいんだよ」

戦国時代！！

一体！？

話をまとめると。

どうやら、あちらこちらの大名は仲違いを止めて、仲良くすることにしたらしい。

で、私は何者か分からないから呼び寄せたらしい。

次にお願ひがあるらしい。どうやら、色んな国を回ってきてほしいらしい。

なんでも、準備などは向こうがしてくれる
私としても手掛かりをつかみたいので、引き受けることにした。

「まずはどこへ行けば良いのでしょうか」

行き先が分からないのでちょっと聞いてみた。

「貴女の好きにして構いませんよ」
ということなので

「じゃあ伊達の領土に行こうかと思います」

私は伊達政宗の領土に行くことにした。

「さて、荷物は軽いわね」

渡してくれたのは刀、金、服だ。

服に関しては三着ずつある。

金も大量にある。足りなくなったら戻ってくるか借りてきて支払いを真田家にしたらいいということだ。

刀。これは私のために一ヶ月かけて作ってくれた。

名前は「洸」。

刀には愛を持つべきと教えられてきたので名前をつけている。

「では、行つて参ります」

「気をつけて」

私は幸村に送り出された。

目指すは伊達領。

今度こそ旅の始まり（後書き）

さてさて伊達領へと向かうわけですが、
伊達さん女にしてみようかな？
なんか楽しくなってきた。

なんかあつたらいつてくださいね！
誤字とか特に。

お嬢さんと刀と私（前書き）

またまた一区切り。

最近、あんまり悪い夢を見ない。
逆になんか不安になってきた。

お嬢さんと刀と私

私は今、伊達領に向かって歩いていきます。

しかしこの服、やたら動きやすい。

全力で走れるなんてね。

ま、有難いことです。

「わかつてんのかコラ！」

この状況どうしたものですかね…。

「すいませんってば」

どうやらぶつかっただけらしいお嬢さん。

見てるのは私だけ。

他の人は輩を見るなり逃げていった。

「てめえ…。謝ったら済むと思ってんのか!？」

「ど…どうしたらいいのでしょうか？」

あゝ

このパターンは不味いよ？

「そうだな…。酒の酌をとるってのでいいぜ」

ほら。言わんこっちゃない

「それでいいのですか？」 乗ったし…。

助けようか。

「失礼」

間に入ると輩は

「なんだてめえ」

だよ…。

そうなるよね。

「これで退いては貰えませんか？」

金を一掴みだすと、あっさり退いていった。

「あ…あの」

お嬢さんも助かったし、良かった。

「なんででしょうか？」

「助けて頂きありがとうございます」

ああ。お礼ね。

「構いませんよ」

しかし、お嬢さんは続ける。

「あの、良かったらお礼に私のやってる店まで来ませんか？というより来てください」

「いや、あのちよつと」

私はお嬢さんに拉致されてしまいました。

「ここです」

連れてこられたのは、旅館。

「入ってください」

中に入るとかなり綺麗な部屋へ連れていかれた。

「娘を助けて頂きありがとうございます」

お母さまだろう。

お嬢さんとても似ている。もう双子だろってぐらいに。

「いえ、構いませんよ」

それから色々と話をしていた。

輩のことや、町のこと。

「実さんは一人で旅ですか？」

「ええ、まあそんなところですかね」

旅、なのかな。

「実さん、お風呂ができました」

お、やったね。

「では、お借りします」

「いえ、ごゆつくり」

私はここで一日を越すことにした。

朝早くに目が覚めて刀が目に入った。
「懐かしいな」

小さい頃はそれが普通だったのに。
「今では、もう」

私の意識は深い闇へと落ちていった。

お嬢さんと刀と私（後書き）

えゝ

次の話は、大体分かつちやうよね。
分かるようにフラグ立てたし。うん。

さて実は今寝てるs

「雪乃、死ねばいいのに」……。あんたが死ねばいいのに！！
いきなりそれはないよ！？

まさか起きてた？

いやいや、それはないね。

ま、取り敢えず、起こしてきます。

私は……。 (前書き)

長いこと待たせてしまったかい？

「待っている人いるかな？」

そんな寂しいこと言わない。

では！！

どうぞ！

私は…。

私の家は道場を開いていた。

祖父の代から引き継いで、父が師として行っていた。

教えているのは真剣を使ったものだ。

五歳頃から教えられた私はその剣は人を傷つけることはないのだと思っていた。

父は

「剣を信じてあげれば私たちを傷つけることはない」と言っていた。

私はその言葉を信じて私がもらった剣に「唯」という名前を付けた。

肌身話さず、大切にした。

流石に学校へ行くときは置いてきた。

そうして私は中学生になった。

教えてもらった技も上達した。

いつまでも、このまま過ごしていけると思っていた。

ある日、体育の授業中、大規模な地震が起きた。

私達はすぐに家へ帰った。

そうして私は見てしまった。

父と母が、お互いの胸を剣で貫いてしまったところを。

祖父は

「見てはいけない」

と言ったが、もう覚えてしまった。

今でもふとよぎる。

涙は、いつしか出なくなっていた。

泣くことにきつと飽きてしまったんだろう。

泣いても何一つ変わらない。変えることなんて出来ない。

そして私は剣を置いた。

ただ、捨てることは出来なかった。

今までの自分を捨てることなど出来なかった。

「結局私は、弱いままなんだ…」
私は、そう呟いた。

私は…。(後書き)

次はいつ頃になるかな…。

仕事をしつつ、更新していきますね。

では!!

伊達領に（前書き）

長らくお待たせ致しました。

いつもより、長くはしたと思うのですが…。
すいません…。

伊達領に

伊達領に入ってから、数日。

つまりは、宿を出てから数日だ。私はただ歩き続けた。なんせ、何一つ起こらないし山だし。

伊達の本拠についた時は喜んだものだ。

「まさかだよ？まさかこんな事になるなんて思わないじゃない」

目の前には鉄格子。

そして兵士。

どうやらスパイとして扱われているようだ。

幸村からの書状も見せたが、兵士には信じてもらえず伊達政宗が来るまで待つていてほしいらしい。

扱い酷いけどね。

暫くして兵士が敬礼をした。

「すぐに出すんだ」

……。

女性の声？

出されて顔を見てみると、眼帯してるが女性。

「使者の方ですね。まずは付いてきていただきたい」

まあ、付いていくけど。

何やら一番奥に。政宗の部屋っぽい。

座ると、前にはやはり女性。

「兵士が失礼をした。私の名に免じて許してやって下さいませんか？」

まさか。

「貴女は……」

「失礼を。私は領主の伊達政宗と申します、以後お見知りおきを」

……。

「ないわ」

「はい？」

つい言ってしまった。

だって、男だと思ってたし。

「なんで男ではないのですか？」

「そう言われましても……」

まあそうだろうね。

私も馬鹿だ。

後ろの戸が叩かれ開く。

「政宗様、小十郎、参りました」

……。

「ないわ!!」

小十郎まで女性!?

幸村からの書状を読み、次は上杉領に向かってほしいらしい。

まあ、それは構わない。

ただ

「では小十郎。後は任せましたよ」

「確かに請け負いました」

政宗が付いてきた。

いや、いいし!

要らないし、領主が離れちゃ駄目でしょ!

「では、参りましょうか」

馬を渡される。

いや、乗ったことないし。

というのを政宗に伝えてみる。

「えっ……」

嘘だろ、マジで?

みたいな目でみられる。

悪かったな、戦争ないし、電車という立派な交通機関があるんだよ。

「馬に乗る訓練をしましょう」

乗れなくていいし、歩くし…。

なかなか上手くはいかない。

現代に帰ったら必要性皆無だからね！

感謝なんてしないからね！

……お尻痛い。

結果

「政宗様、もう少し早く行きませんか？」

「どうしてです？」

「早く着いたら、街を見ていただけますから」

乗れるとかなり楽になるのがバイクや自転車とかと同じところ。

お尻だって、痛くないし。

…たまに痛い瞬間が有るけどね

二日走ったら上杉領に着いた。

「さて」

政宗は呟いた。

「遊ぶぞ」

私の台詞

政宗は驚いてたけど知らない。

私は…遊ぶ！！

伊達領に（後書き）

はい。

「いや、はいじゃないよ」

解ってるよ。言わないでよ。

ある日の事さ（前書き）

ちよつと長く待たせた割に短い。

違つんだよ、色々忙しかったんだ！！

「あつそ」

うわゝ

怒ってる

ある日の事さ

これは、伊達領に着く前のお話。

「笹原殿」

何か呼ばれた？

そう思つて振り向くと真田の紋を入れた服を着た人が走ってくる。

「どうかしましたか」

急ぎらしいので聞いてみる。すると

「ちよつと一旦戻つて頂きたい」

ここまで来て…。

「いや、これ私戻らなくて良かったんじゃないの？」

戻つてき

てやっていたのは宴の準備。

「私、やらなきゃいけないことがあつたのに…」

「おっ！！主役登場じゃないか、あんたが笹原だろ？」

すごいフレンドリーな人居たけど名前不明だし。

「そうですよ。私が笹原です」

一応挨拶だけはしておかないと。

「俺は猿飛佐助つてんだ、よろしくな」

これがかの有名な猿飛佐助？

いやいや、あり得ない！！

だつて忍者でしょ？

物静かにしてないといけないはずで

「あっ」

幸村さんがこつちみて笑つてるし。

…人の不幸は蜜の味てか？

腹黒い！

いいよ、戻ってきたし歓迎会なんですよ？

たっぷり頂かせてもらいますよ？（笑）

その後はわいわい騒ぎながら、食べては飲んで食べては飲んでもう入りません…。

でも呼んでもらって良かったかもしれない。

知らない人と話出来たし、一般人とも話せたし

ただ、戻るのがすごく面倒だ

「馬に乗っていきます？」

馬に？

いや、まず乗れないからね

あなた方の常識はこっちには通用しない。

徒歩で再び戻る。

「ということがあったのよ」

山にあるあの時泊まった宿にまた泊まることになった私は宴会について話をした。

その日ずっと宴会について話をして私は寝た。

ある日の事さ（後書き）

皆様、すいませんでした

早く更新はしたいんですけど

ノッテル時とノラナイ時の差が激しくて
しかも色々忙しかったんだ！！

「次」

了解です！

冷たい目（前書き）

ちよつとノつてたから更新は早い。
ただやはり短い

冷たい目

上杉領に入った私。

「遊ぶ」

という宣言通りに遊ぶ。

政宗とは完全に別行動。

フリーダム、私！！

市場を見に行く。

食べ物が主体だけだね。

すると先程別れたはずの声が聞こえてきた。

「離せといってるだろうが！」

「良いじゃねえか、酌ぐらいケチケチするものじゃねえだろ」

やはり政宗か。

束縛されてる私…。

仕方ないな

「はいはい」

政宗と輩の間に入る。

「ん？姉ちゃんが酌してくれるのか」

「してあげるけど、ただではいかないわよ？」

「いくらだ？」

乗ってきた。

「金はいらないけど、一勝負といきましょう」

取り出したのはサイコロ。

「大きい目を出した方が勝ちよ」

相手側が先に振る。

「4か」

普通の大きさ。

私が次に振る。

「5ね。私の勝ちよ」

勝負に勝ったので政宗を救出し、その場を離れる。

「私の時間を返してよ！」

政宗に訴えるが無視される。

「姉ちゃんすげえな」

「さっきの見てたぜ！」

「なかなか女のくせにやるじゃねえか」

ま、皆からの賛辞で許してやるか。

この時知らなかった。

遠くから見てる視線に。

「あれが真田からの使者のようですね」

「そうですね」

「ちょっと驚かしてあげましょうか」

右手には刀。

目には少し楽しそうな表情を浮かべていた。

冷たい目（後書き）

感想とか頂けたらありがたいです。

「ま、しっかり書きなさい」

あーい。

過去 第二（前書き）

今回はちょっと長めだよ

過去 第二

さっきの騒ぎがあつて、今また私の前で事件が起きる。
私の前で、というより私に、と言つたほうが良い。

いきなり政宗が

「後ろ！」

と言うから振り向くと刀を振りかぶつた青年。

本能で腰にある剣を抜く。

じゃないとやられる。

明らかな殺氣を向けてきている。

——キンッ！

刀と剣が合わさる。

「一体何なのよ！」

「やりあつたら楽しそうな感じだったからよ、ちょっとケンカふっかけてみたんだがなかなかやるじゃねえか」
「じゃなくて、誰よ…。」

離れた所では政宗ともう一人の青年。

「久し振りですね、政宗」

「上杉、何故ここにアイツがいるんだ」

上杉謙信。

伊達領の隣にある国の頂点。

本来なら下町にはあまり出てこない。
ある理由を除けば。

「いえ、慶二が行きたいと言つたので」

慶二。

前田慶二。

歌舞伎者である、慶二は上杉と仲が良く、遊びに来ることもしばしば。

今回、真田からの使者が来ると聞いて上杉領に来たらしい。

「しかしあの女性の方は一体何者ですか？慶二の刀を受け止めるなんてなかなか居ませんよ」

「それは同感だ。私もそれは知らなかったよ」

ただ差しているだけでは無かったのか。

しかも見てる限り手練だ。…楽しくなってきた。

「そろそろ離れて貰えない？」

いい加減うざい…。

「何言つてんだよ、これからだろ？」

もういい。

「私だつて怒るんですよ？」

私は離れる。

「怒るのか。じゃあ一丁、ケンカといく」

勝負は一瞬。

私は相手の腹に居合いで（鞘付き）叩き込む。

慶二は反応できずに倒れる。

「凜、そんなに強かったのか」

政宗ともう一人がやって来る。

「また敵!？」

ただの勘違いなのだが、私は居合いを青年に打ち込む。
が

「危ないですね…」

普通に止められる。

「こいつが上杉謙信だ」

…はい？

慶二を城に運び、私たちは謙信の部屋に。

「先程は失礼しました、上杉謙信と申します。先程のケンカ青年は前田慶二です」

「なんですと！」

あれが、祭大好きの前田慶二か

「なんでいきなり斬りかかれなきゃいけないのよ」

謙信が言うには

「なんか出来そうな奴だったから行ってくるわ」と言っていたらしい。

その話は程々にして

「これが文です」

幸村からの文を謙信に渡す。

「確かに」

謙信は文を開けて読む。

「政宗、これを読みましたか？」

「うむ」

「国に戻りなさい。凧殿なら一人でも充分でしょう」

一体何の話か分からない。

私にも関係があるのかないのか。

ただそれだけが知りたかった。

その日は泊まることになったが、眠れない私は縁側に出た。

「眠れないのですか」

そこに謙信が現れる。

「ええ」

「そういえば、凧殿は剣が使えるんですね」

謙信は今日の事について言っているのだろうが、その話題には触れ

て欲しくなかった。

「女性であれだけ…」

「その話題には触れて欲しくないのでもやめてくれませんか」

「いいえ、話さなければなりません」

「一体何を言っているのだろう。」

話をしなければならぬ？

「知ったようなことを言わないでくれませんか」

私の何がわかってるのだろうか。

「貴女の剣は本当にそれを望んでいますか？」

……私の、剣？

幸村に貰った剣を見る。

これは私の剣ではない。

「そうです。それは貴女の剣ではない」

でも、と謙信は続ける。

「貴女が自分の剣を想えば想うほど今持っている剣は輝くのではないでしょうが」

私には…。

「私には…出来ません。剣を一度捨ててしまったのですからそれに…。」

「まだ恐いですか」

私の心を読み取るかのような言葉に驚く。

そう、私は恐いんだ。

剣は人を殺してしまふ。

私の両親を殺してしまった剣を私は受け入れられない。

「そうですか」

謙信は立ち上がる。

「ちよつと付いてきてください」

私も言われるがままに付いていく。

「貴女は一度見た方がよい」

滝がある場所に私は連れていかれた。

滝を見ろと言うのだろうか？

「あの池に入って下さい」

入ると驚く姿が滝に映った。

過去 続

父と母が死んでから、私は剣をまったく取らなかったわけではない。

何度が振った。

何度が磨いた。

何度も眺めた。

剣は生活の一部だったから、父と母を繋ぐ唯一のものだったから。

祖父はおそらく知っていただろう。

剣を拒みながらも近くにいた私を。

「紅」

私は自分の剣の名前を呼ぶ。

母が剣と会話していたことを思いだし、話しかけてみる。

（初めて話しかけてきたね）

そんなことを言われた気がする。

何故私にも剣と会話出来るのか分からないが、聞こえたものは仕方がない。

「母は幸せだったのかな」

紅は母から譲り受けた剣だ。

だから母の事をよく知っているはずだと思った。

（幸せ？）

「だって死んじゃったんだよ？もう何も出来ないんだよ？」

生きているからこそ意味がある。

（駄目じゃない、そんな事言ったら）

紅が少し怒った口調で言う。

紅は色々話してくれた。

母の小さい頃、そして紅との出逢い。私が産まれたこと、そして私が剣を取ったときの母の喜びを。

「でも私にはもう剣を手取ることは出来ないかも」

（そう簡単には立ち直れないよね）

剣を信じた母を殺した、殺してしまった剣を私は信じられなくなっていた。

紅以外は。

そう私は剣をまだ信じていたんだ。

「私は…」

傍らにある剣を、「唯」を見る。

「今はそれでいいですよ」

謙信は言う。

「まだ信じているという、その事実だけで」

謙信は「寝なさい」と言っ、去っていった。

「母さん…」

次の日、政宗は領土に帰ると聞いた後、出発した私は上杉領を出たところで慶二と出会った。

「待つてたぜ」

まさか

「着いていくぜ、暇だしな」

やっぱりそうなりますか？

最近は一人で居ることが少なくなってきた気がする。

（一人じゃないですよ）

「？」

ふとそんな声が聞こえてきた気がした。

慶二は前を歩いているし、私は何も話してないし。

「まさかね」

今の声は、私が昔聞いていた声とよく似ていた。

おぺんきょー（前書き）

お待たせいたしました。
相変わらずの駄文ですが、どうぞ

おべんきょー

上杉領を出た私は浅井長政に会いに行くことにした。

「慶二、近道とかない？」

ちよつと複雑な道を行きすぎて疲れてきた。

「ないな」

ですよね〜。

海沿いだものね…。

そろそろ樹の匂いがほしい。

飽きたのよ！！

見渡す限りの海。

もう…嫌！

「遠くなっても良いから街にいこうよ」

慶二の遊び癖なら良いと言ってくれると信じての言葉は打ち砕かれる。

「さつさと用を済まして休めば良いだろ」

まともな意見。

「裏切り者！」

そんな非難も簡単にあしらわれる。

で、馬で三日間。

痛い…。

お尻が痛いよ〜。

「慶二、宿に行こう」

返事を聞かずに私は宿に入る。

長政に手紙を渡すのは後でも出来るの。
お尻がもう限界よ。

ご飯を食べてゆっくり休んだ後、長政に会いに行く。

慶二は長政と知り合いらしい、顔広いよね。

長政の隣には、やたら綺麗な女性。

かの有名な市様だ。

人じゃないよ…。

シミ無いし、髪長いし、艶々だし。

いいなあ…。

私もなれたらな…。

「おい、手紙を出せよ」

慶二から肘打ちを食らう。

いけない、見とれてた！

長政に手紙を渡す。

「なるほど、そうなのか」

なんのこっちゃ。

てか、

美声…。

ヤバイ！！

何この夫婦

「長政様、市にも見せて下さい」

「すまないな、つい」

ノロケ…うざいけどね。

でも良いよね。

こんな夫婦。

いつまでも幸せでいられそう。

「慶二、泊まっていくな？」

「そうさせてもらうか」

「良かったら実殿も泊まっていくな？」

「市の部屋になりますけどね」

優しいよ！

ご飯を食べて、風呂にも入って、現在市の部屋。

「落ち着かない？」

市様当たり前ですよ…。

でも聞かずに居られない。

「手入れの仕方について教えて下さい！」

「え？」

詳しく説明する。

「なるほど、お肌の手入れの仕方ね」

「はい」

さて、どんな薬品とかが出てくるんだ。

「特に大したことはしていないわ」

「え？」

市様が言うには

「毎日水でしっかり洗うだけよ。で、この時ゴシゴシと力を入れてはいけないわ。じっくり馴染ませるように。で、拭う時にはトントンと叩く感じよ。優しくするの。あと大事なのは、綺麗になあれっつてお祈りしながらやること」

へえ…水だけ。

メモは取ったわ!!

おぺんきょー（後書き）

もう少し長い方がいいとか、こんな感じでいいとか、出来たら書いて頂けたらと

悔しさ(前書き)

なんでだろう…。
なんでだろうね。

悔しさ

市様に教えて頂いた通りにやってみた。

すると、私の肌に…（笑）

変化があるわけでもなく。

まあわかってたんだけどね？

「どうせ私の肌は復旧不可能だよ!!」

「とうとう壊れたか」

慶二に酷いことを言われる。

叫びたくもなるよ！

だってここ

「島津さん」

暑いだよ!!

長政に手紙をわたして、2日たったとき。

「慶二、どうしたの？」

「次の行き先は？」

残りの手紙は後二通。

「どこへ行くのがいいかな？」

「まあ順当にいったら島津だな」

あの豪快な雰囲気を持った武将さんか…。

「でも鬼島津っていわれてるんでしょ？大丈夫かな」

「実際はいい人だ。ただ敵には容赦ないからそう言われてるだけさ」
へー…。

なら大丈夫かな。

と旅立った。

南国、という大切な事を忘れて。

案の定こんな感じで暑くなっている。

正直、諦めたい。

でも慶二が行くからただ着いていくだけ。

なんと適当なんだろう。

「実、見えたぜ」

ようやくか！！

見えたのは島津の陣営の中。

事情を説明すると島津の元へ連れていかれる。

「おなごと慶二が使者か」

なんか馬鹿にされた感じがする。

「まあ、手紙は読んだわ」

中身に付いては知らないが。

協力関係がどうのこうのと言ってたし、同盟の話かな。

「協力はしたいが、負け戦には協力できん」

「どうということよ？」

「儂と勝負せい。勝ったらこの命預けよう」

つまりは仕合えと。

取り出したのはひとふりの大剣。

これは勝負しないと駄目な気がする。

「わかりました」

ちようどいいや、この暑さの鬱憤。

晴らさせて戴こう。

私は唯を構える。

（隙がない）

島津の構えに隙がない。

先に動いたのは島津。

「ふんっ」

降り下ろされる。

意外と速い。

地面に斧が突き刺さる。

…まてい。

喰らったら死ぬ？

てか殺る^{メジ}気？

「うわっ」

これはまずいわね。

隙がないのよ。

また構えに戻ってるからね。

私も一つ、仕掛けてみますか。

「はっ」

まず横薙ぎ

「ふっ」

そして縦切り、難なく受け止められた、
がまだ終わってない。
「すっ」

突き！

が幅広い大剣に阻まれる。

うーん…。

どうしたものか。

受け止めたら諸ともやられてしまいそうだし。
考えが甘すぎたのかな。

「仕方ないよね」

剣を鞘に納める。

「諦めるのか？」

慶二は聞いてくるが取り敢えず無視。

「慶二よ、しかと見よ。このおなごはまだ諦めておらん」

さすがに島津さんにはばれた。

私は敵意を全て内に秘めて立っている。

相手が範囲内に入れば斬るつもりで。

相手を傷付ける、殺す技法。

それが居合い。

居合いの欠点は動かないこと。

でも私は。

「なに！？」

敵に向かって走る！！

「はあああああっ！」

敵意を剥き出しに、全てをこの一撃に！！

剣を鞘から抜き放つ！！

ドス…。

という音と共に訪れたのは左横腹への衝撃と痛み。
剣先には微かに触れた感覚。

「ぐっ…」

重い…。

島津さんは全然本気じゃなかった。

武将を侮った私が悪かった…かな。
私の意識は途切れた。

「慶二よ、一体このおなごは何者だ」

「わかんねえよ」

島津が思わず本気でやらざるを得なくなるほどの女。

「たまげたわ。この勝負、僕の負けじゃな」

「なら力をかしてくれるかい？」

「もちろんじゃよ」

だつてよ、良かったな実。

目が覚めると、辺りは暗い。
起き上がると脇腹が痛んだ。

「つつ…。そうか」

私は島津さんと勝負したんだった。

あの技は捨て身だから使いたくなかったんだけどな。

案の定負けたし。

なんか悔しいかも。

悔しさ（後書き）

だいたい一撃必殺、みたいになってる
まあ構わないよね？

更新が徐々にできるようになったので少しは長くしてみますね
では

次元を越えて（前書き）

長らくお待たせいたしました。

うまくまとめているかわかりません。

駄文かもしれませんが。

よんでやってください！

次元を越えて

「間に合わなかった」

その後悔が私の心を埋め尽くしていく。

目の前で建物が飲み込まれていく。

家の中に居た人は家と共に流され、外を歩いていた人は水の直撃を受けて動かない。

「実、お前も早く山に――！」

慶二が叫んでいる。

私だけ、逃げられない。

島津さんも協力してくれるみたい。

私は手紙の内容をあまり知らないが、島津さんは

「民が生きるために協力を望んでいる」

だそうだ。

戦い関係ないじゃん…。

私は最後に豊臣秀吉のところへ行くことになっている。

そこで私は気がついた。

私宛に手紙があつたことを。

今まで気がつかなかつた。

真田さんの手紙かな？

題名は

「私へ」

？

でも確かに私に宛てて書かれたものだ。

私へ。

私は今何処にいてるのでしょうか。

私のことだからきつとのんびりと旅をしているのでしょ…うね。
だから、ここに手紙を置いていきます。

この日本に、大震災が起きるの。

私は各国にそれを知らせて歩いているのよ。

だけど私はそれを知らないの。

だから後悔しないようにこうやって手紙を残した。

早い段階で見付けてくれたなら嬉しいのだけどね。
きつと見付けてくれているはずと信じて。
急いで。

でなければ私はまた後悔してしまうわ。

「待つて…」

どういうこと？

私は、大震災が起きるのを知らずにゆっくりと旅をしていたの？
各国ってまだ知らせていないところ有るのに。

「慶二！！急ぐわよ！」

休んでなんか、居られない！

島津の国では。

「どうだ婆さん、間に合うか」

目を閉じ手を合わせ老婆は祈る。

「この国は…」

秀吉の国まではまだまだ遠い。

少し早く行かなければ…。

間に合わせる。

私は何度も後悔してきてるんだ。

それなら忘れちゃいけなかったのに！！

「実…」

慶二の声が聞こえるけど、構ってる余裕はない。

地響きが聞こえる。

いや、これは…。

地鳴り！

「もう街は近いのに！」

また、間に合わないというの？

また後悔してしまうの？

街に入るとすぐさま住人をさがす。

が、人一人見つからない。

「誰かー！」

誰も居ない！？

どうということなのだろうか？

少し呆然としていたら、家の中から女性が出てきた。

「どうして誰も居ないんですか？」

理由は

侍の方々が地震が起こるからと教えにきたらしい。

案内もしてもらったそうだ。

私と慶二も一緒についていくと、そこには幸村がいた。

「幸村さん！」

「おかえり。よくやってくれた。時間があつたからほかのところにも回って知らせていたんだ」

まさか、何度も繰り返している内に結果が変わったとも言つのだろうか。

ドクン・・・。

胸が、痛い。

でもなんか嫌な感じじゃない。

きつと、この世界での役目を終えたから、元の世界に戻ろうとしているんだ。

私は、その場をそつと離れた。

「徐々に体が薄くなってる・・・」

私の体は淡く光っている。

もうすぐなんだろうな。

元の世界に戻ったら何しようか。

剣道でもやろうかな、もう一回。

今度は捨てないで。

おじいちゃん、喜ぶだろうな・・・。

「実！」

「お母さん、続きは？」

私の膝には娘、楓が座っている。

私が書いた話をしてあげていたところだ。

「秘密よ。ここから先はご自由に、ってね」

「流石は大物小説家だな」

部屋の奥から男性が出てくる。

「あら、それは皮肉かしら？」

実はそれに対しちよつとだけ毒を吐いてみる。

「いや、そんなつもりじゃないよ」

私のコーヒーを淹れてくれていたようだ。

「お母さん、稽古の時間だよ」

息子、快が道場から顔を出す。

「もうそんな時間か……。楓、行こうか」

「はい」

楓も走って着替えに行った。

「実」

「ん？」

男性は実にキスをした。

「ふふっ」

男性が道場に向かっていくのを見ながら、私は小さく微笑む。

「ねえ……。***」

男性の名前を呼び、振り向いたところをキスした。
驚いてる驚いてる。

私と男性は手をつないで道場に向かった。

リビングに窓からの風が吹く。

その風は、小説の最後のページを開いた。

そのページには挿絵があった。

女性と男性が光に包まれている絵と、一つの文。

その文は、こう書かれている。

「次元を越えて」
と。

T H E E N D

次元を越えて（後書き）

次元を越えて、終結でございます。

ここまで読んでくださった方、応援してくださった方、
どうもありがとうございます。

この小説は私の処女作です。

駄文です、ダメダメな小説かもしれませんが。

ですが、まだまだがんばっていいこうと思っています。

もし感想があれば送ってください
まっています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8201n/>

次元を越えて

2011年12月20日23時46分発行